

生徒と地域に心を注ぐ
歌碑 荒木正恭
下之町



登崖に
呼びかけてゆく
九重の滝坂に見む
千草八千草

荒木正恭は1923（大正12）年から20年間、沼田小学校長として在職しました。約5千人の卒業生を出し、生徒や地域から愛され尊敬され

ていました。
当時の沼田小は全校児童2800人余りの県下一のマンモス校。児童に話し掛ける大切な機会として、正

恭は全校会礼に力を注ぎました。また、どんなに忙しい校務や出張のときでも、毎日校舎を一巡して児童や教師に声を掛けたり、学校の名前入りのちようちんを持って町を巡視したりもしました。黒のフロックコートに白手袋、黒の山高帽を手にし、小柄で鼻下に八の字の立派なひげとあごひげを生やしていた特徴ある姿の正恭。町でもにこやかに朝夕のあいさつに努めていたことから、「優しい父親のように親しまれていた」と、多くの逸話が残されています。
碑は、卒業生の青年有志で組織した「友和会」が、正恭が住んでいた滝坂の階段を下りた沢の近くに建てました。「九重の滝」と変化のある美しい滝の周辺の景観は変わってしまいましたが、滝坂は今でも沼田小児童が通学路として利用し、朝夕、元気な笑い声が聞こえてきます。碑

に刻まれた額には「総厚生」と掲げられ、「全てのことは、体力、健康を基本とし、豊かな暮らしができるように」という理念の下に活動していたといわれています。



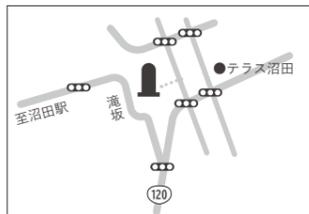
正恭は滝坂に位置した旅館に居住していたという。放課後、下町から通う沼田小児童が、楽しそうな表情を見せながら滝坂を通過して下校する



正恭の退職後に結成された顕彰会は、1957（昭和32）年に沼田小学校庭に胸像を建てた

歌に託す 未来を背負う 子らへ

いつの時代も、子どもは地域の宝であり希望です。人間性の豊かさや奉仕の精神を育む思いが込められた碑は、今も子どもたちを見守っています。



学び子の朝のつとめも

おごそかに

はききよめけり

氏神の苑

木立に囲まれる砥石神社社殿の左奥、竹やぶを背に大きな杉の木の下に立つ自然石に歌が刻まれています。神社の清掃活動に取り組みむ村の学童の様子を詠んだもので、さわやかな夏の朝の風情が浮かびます。

華道の師匠武井柳仙（本名和十郎）は、利南村沼須の石屋の長男として生まれ、通称十さんとして地域から親しまれました。清掃を通して、子どもたちが社会奉仕の精神や快適な環境を自らでつくる地元愛を育めるよう、精力的に指導しまし



神社周辺は升形小学校の通学路。歴史を聞き、刻まれた文字を覗き込む升形小児童

た。碑は、石工の腕を自らが奮って刻みました。
柳仙は独学で義太夫を語り、安政

年間から伝わる沼須人形芝居の一員として各地を巡業。神社では、毎年4月上旬に人形芝居が演じられます。

氏神の聖域守る子の姿

歌碑 武井柳仙 -砥石神社-



金井七郎さん
-鍛冶町-

多くの子ども集い 地域きれいに

沼須に20歳まで住み、砥石神社は一切経や人形芝居の行事でぎわったり、野球の練習をしたりと懐かしい場所です。神社の清掃は毎月1回、境内の掃き掃除を中心に一生懸命取り組みました。20～30人と多くの子どもが集まり、9人いる私の兄弟の何人かも参加していました。友人たちに会えるうれしさや地域がきれいになる気持ちよさが思い出されます。



体力づくりは教育の基礎

歌碑 岡田梅松 -沼田中学校-

建き子の

はげむすがたぞたのもしき

我が学園は永久にさかえん

岡田梅松が沼田中学校校長在任中、長田清さんは美術教諭として教鞭を執っていました。「先生は率先して生徒の中に入り、部活動やテニスの指導を通して、何事にも情熱を傾けるよう訴えていました」。当時の校長は近寄りづらい存在でしたが、「生徒は先生に積極的に助言を仰ぐなど、尊敬のまなざしを向けていました」と振り返ります。

梅松はお酒をこよなく愛し、教職員とよくお酒の席を共にしました。「先生はお酒

を飲むと、相手のひざをつねります。大事に思う合図です」と、長田先生は懐かしみます。

梅松は退職後、教育への情熱を文学に傾注し、短歌や

掌編小説など数多くの作品を残しました。「たくましく取り組む生徒の姿は明るい未来を築く礎」として、同校中庭に石碑が埋められています。

妻のみねも文学に励み、晩年親しんだ俳句は四季折々の眺めが多く詠まれています。「若草俳句会」が金剛院(坊新田町)に碑を建立しました。



生徒の明るい未来を描く

長田清さん
-戸鹿野町-